寄稿

論文の書き方コンプレックス － 文系学際領域から －

井上 京子

日本語論文のノウハウの知識が欠如しているというコンプレックス意識はどこからくるのかを探るために、文系学会誌の掲載論文形式を分類し、その特徴から原因を考察した。まず、論文を書くことに対するコンプレックスは研究者の研究領域、投稿先の学会誌、執筆活動に対する研究者自身の意識などが大きく関わっていることを示し、その上で、知識欠如のコンプレックスを解消するには、論文指導の場を増やすとともに、掲載論文のフォーマットからそれぞれの研究分野の特性を読み取ることも必要であることを提唱した。

キーワード：論文作成術、言語人類学、学際領域、論文投稿、文系と理工系、Citation Index

1. はじめに

「一人前の人類学者として認められるには、フィールドワークの成果を一冊の本としてまとめることだ」と刷り込まれてきたアメリカでの大学院生時代、日本語で論文を書く機会も、またその必要も全くなかった。英語で論文を書く際には、MLA (Modern Language Association) Handbook のスタイルシートを参考に、つたない英語でパラグラフ・ライティングを心がけ、あとは指導教員に添削してもらうだけでよかった。

ところが、活動拠点を日本に移したときから、日本語でものを書く機会が増え、その素地が全く欠如している自分に当初は愕然とし、手探り状態でこれまで過ごして来た。このような、日本語論文のノウハウの知識が欠如しているというコンプレックスは、果たして大学院時代を海外で過ごした自分のようなものだけに当てはまるのか、それとも文系・理工系研究者おしなべて、日本語で論文を書くものすべてに共通して言えることなのかを本稿で分析し、考察する。

ちなみに、導入部分に結論は書かないのが文系の多くの日本語論文の特徴であると考えるので、ここでも結論は先送りする。

2. 言語人類学：学際領域が故のコンプレックス

言語と文化のかかわりに興味を持つ筆者が、専門研究分野として常日頃名乗っているのが言語人類学である。これは人類学の中でも言語に重きを置く学問で、したがって社会学系と人文学系の接点とも言える。この学問で論文を書く場合、学際的であるが故のメリット・デメリットを背負いながら、論文作成の諸条件をクリアしていくことになるのだが、以下にそこに立ちはだかる障害物を3点挙げる。

2.1 言語学と文化人類学：どちらのフォーマットを取るか

言語学においては、まず文例列挙とその分析が論文構成の中心となる。たとえそれが著者の内省のみをデータとした生成文法理論学派であろうが、少数危機言語を記録する目的の記述言語学であろうが、あるいは音声・音韻、形態、文法、意味、語用といったデータの単位の大小にかかわらず、はたまた今この瞬間を切り取る共時的データ、追跡調査を行う通時的データのどちらであろうが、みな文例至上主義である。

それに対し、文化人類学では伝統的に民族誌（エスノグラフィー）という手法を用いる。フィールドワークで集めた資料をもとに、ある社会における文化的に有意な行動を記録し、記述する方法である。この民族誌フォーマットでは、現代レトリックの4つの目的別種類（詳しくは澤田 1983 pp. 66-70 を参照）[1] のうち、「描写」（ディスクリプション）と「物語」（ナラティブ）を柱として書くことが多いのに比べ、言語学では「説明」（エクスポジション）、「論証」（アーギュメント）が中心で、「物語」（ナラティブ）が入り込む余地はほとんどない。

さらに、言語人類学でも認知科学にまたがる領域の研究を論文にまとめる場合は、心理学系論文のフォーマットも視野に入れておく必要がある。すなわち、統計値を

提示して、集めたサンプルデータが全体を象徴するどれほどの信憑性があるかを読者に納得させなければならないのである。インフォーマント一人のライフ・ヒストリーを綴った民族誌が、その個人だけの特異な現象であったのでは、普遍性を追究する認知科学のデータとしてはそぐわない。

このように、学際研究をしている者は、関連研究分野ごとの論文フォーマットの特徴を踏まえ、書きたい論文のテーマからどのフォーマットを選べば最も効果的であるかをそのつど判断しなければならない。

2.2 言語人類学的論文の投稿先

日本には言語人類学プロパーの学術誌がないため、周辺領域の学会誌へ投稿することになる。それはたとえば次のような学会誌があげられる。

- 『社会言語科学』: 人間相互のコミュニケーションあるいは言語の機能を特に重視した、超領域的な学会として 1998 年に発足した社会言語科学会の学会誌。「伝統的な言語学の枠組みだけでは特定、解明できない言語問題」[2] の本質を探る研究を掲載のターゲットとしている。
- 『認知科学』: 三宅 (2004) [3] は科学を 3 つのカテゴリーに分類し（1）自然界における特定可能な対象の因果関係を記述するもの、（2）因果関係までは証明できないが相互作用は推定できるもの、そして（3）対象とその対象を規定している観察者との関係が問題になるもの（つまり研究対象の存在そのものを問題にするもの）と考え、認知科学で扱う研究を（3）の観察者自身が系に含まれてしまうような場合、すなわち人間や社会を対象とする学問として位置づけている。自然科学関連の研究論文が多く掲載されるが、言語コミュニケーション分野の特集号が組まれると言語学・心理学・社会学・情報科学などからも投稿が増える。

これ以外にも、言語人類学の研究者がこれまでに足場としてきた伝統ある学会誌には『言語研究』や後述する『民族学研究』などがある。

こうして、論文の目的如何でどのフォーマットを取るかが決まり、どこへ投稿するかの目安をつけたとしても、実は論文執筆の大前提にもう一つ重要な要素がかかわっていることに触れなければならない。それは、論文を書くこと自体に対する執筆者の問題意識である。

2.3 文系と理工系の執筆者意識の違い

その違いを端的に言い表そうとすれば、報酬を受ける論文執筆と支払う論文投稿の違いといえよう。

文系の論文を学術誌に投稿する場合、投稿料を徴収されることはまずない。学会員として会費を払いさえすれば、当該学会誌への投稿資格を得ることができ、その後は何度投稿しても無料で査読してもらえるはずである。ただ、その学会誌は年に 1 回、多くて 4 回程度しか発行されないものなので、必然的に掲載許可をもらえる論文数は絶対的に少ない。一人の研究者の論文業績数は理工系に比べれば圧倒的に少なくならざるを得ないのである。

一方、理工系の学会誌では投稿料（というよりは、掲載が決まってから支払うものであるから掲載料と呼ぶべきだろう）を収めるのが一般的である。自費出版してでもとにかく数多くの論文を短期間に公表する必要性に迫られての対応策と考えられる。これは、研究成果を公表するのが時間との戦いであるような分野であればあるほど、また、共著として複数の研究者が分担している場合であるほど顕著に見られる傾向である。

それでは、学会誌に発表する機会が少ない文系の研究者は、その他どのような場で研究成果を公表するかといえば、まず大学紀要という手段がある。これは大学関係者の一番手近な発表の場であり、学会での口頭発表原稿を手直しして出版形態に整えたり、学会誌投稿へ向けての下準備的な位置づけとして活用されているように思われる。また、紀要に載せるには量的に長すぎたり、商業ベースにはのせられないが学術的価値のあるような研究成果を発表する際は、出版補助を取り付けて（大学出版会などから）単著、共著の本を出すこともある。

こうした公表形態を見てもわかるように、文系の研究者にはお金を払って論文を出版するという風土が希薄である。むしろ、「物書き」という名のとおり、ものを書いて収入を得ることを生業とする文化の継承者として自分を位置づけている研究者のほうが多いのではないだろうか。言ってみれば、理工系の研究者は研究をするその行為自体に対して研究費という形での報酬を受け取り、文系の研究者は研究結果を書くことによって報酬を得るの

である。(もちろん、理工系の研究者も論文を書かなければ次の研究のための研究費を得ることが難しくはなるが、ここではあえて論文原稿の金銭的価値を比較してみた。)

それだけに、文系の成果は万人の目にさらされても足るだけの出来栄えが要求されるのだが、その形式にははっきりとしたスタイルシートのようなものがあるわけではないのが不思議である。しいて言えば、英語論文を書く際には前述の MLA を手本とする場合が多いためか、それをそのまま日本語に転用している著者も見受けられる。しかし、「投稿の手引き」まで用意されている日本物理学会や日本化学会所属の研究者から見れば、文系の現状の論文形式は無法地帯としてうつるだろう。そして、無法地帯であるがゆえに、自分の論文スタイルを確立するのに悪戦苦闘し、ついには書かずじまいになってしまっている文系研究者がどれほど多いことか。

3. 論文指導の現場

転ばぬ先の杖として、我々研究者が論文作法技術を身につける場は、日本ではどこにあるのだろうか。大学、同僚、学会の３つの場を見てみることにする。

3.1 大学教育での論文指導の欠如

日本の大学では学部、大学院を通じて日本語論文指導の授業はほとんどない。[注1] 卒業論文、修士・博士論文を日本語で書く場合でも、先人の慣例に従いながら指導教員に個別指導を受け、まとめるのが通例である。さらにまじめな学生なら「○○論文の書き方」のような指南書なども参考にしながら自己流に書いているのが実情である。

『民族学研究』の編集者 [4] が「凡庸な紋切り型の」嘆きであるとは自認しながらも編集後記にこう書いている。「修士課程では海外調査に出ず（現実的にもでられなかったのだが)、民族誌や理論的文献を丹念に読んで考察し、それをもとに論文を書く訓練を積むよう指導された私の世代とは違って、今 [2002 年当時] は修士（博士前期）課程から海外調査に出かけることができる。そのため「論文の書き方」の基礎がためが十分ではない。」[注2]

こう言われれば、確かに海外に出てしまう学生（筆者自身も含め）の書く日本語論文はなっていないらしい。また、日本における民族学・文化人類学専攻の大学院では、論文の書き方の基礎がためは指導教員から個人指導されるべきものであるとの認識もうかがえる。しかし、筆者自身アメリカの大学に留学した経験から、アメリカでは留学生対象の英語の授業（English as a Second Language）に必ず論文の書き方指導の科目が設置されていたことを考えると、日本の大学の留学生対策にこうした授業が望まれることは想像に難くない。

ただ、世界中の同業者に広く読まれるようにとのねらいから、日本でも始めから英語で論文を書く研究者も増えてきており、日本語論文の必要性は限られたマーケットに絞られていく可能性も否めない。事実、日本天文学会のように、理工系の研究分野では国内向け学会誌でもすべて論文は英語に限っているものもある。

3.2 同僚による批評の欠如

大学院生、ポスドク、研究者ともなると研究成果を論文の形としてまとめる機会が増えるが、輪講、演習、研究会などでの議論は主に内容に関する批評に終始し、用いられる資料もレジュメどまりであるため、議論を経た上での集大成としての完成論文を複数の目で見るのは査読者か、出版された後の読者、ということになる。

日本の研究者が英語で論文を書けば、ネイティヴ・チェックを必ずしてもらってから論文投稿するのが暗黙の了解であり、そこで論文構成の不備に対する批評を受けられるのだが、日本語で論文を書く場合は、執筆者自身がネイティヴ・チェックを兼ねてしまったり、身内にみてもらうだけで済ませてしまう場合が多い。その結果、独りよがりの文章や言い回しのために、わかりにくい論文が横行することになる。

3.3 学会発表での質疑の欠如

日本国内の学会において、レジュメを棒読みする発表や、司会者以外からは質疑を受けない不活発な発表がしばしば見られるが、これも、前もって広く自分の研究内容を他人に批評してもらうような文化が未発達であることを反映している例である。

質疑においてネガティブな質問や反論をするのがはばかられるような土壌が存在する学会もあるが、発表者と質問者がともに建設的議論を交わすことが、研究のさらなる発展、そしてよりよい論文の作成に欠かせない。

ただ、最近の国内学会では、海外での論文発表を見据えて英語で発表する研究者も増えてきている。文系でもCitation Indexなどの対象になっている外国論文誌を投稿先として重要視する傾向のあらわれと思われる。そうなると、日本人同士が日本の学会で英語で質疑応答するということになり、そうした状況に違和感を覚える参加者は質問を差し控えてしまうようである。

4. 学会誌のフォーマットにみる研究分野の特性

最後に、日本語による論文原稿の一般的な構成を概観し、数誌の文系学術誌を参照しながら、それぞれのフォーマットからその研究分野の性格を分析し、考察する。これは掲載論文の内容はもちろん、フォーマットの違いからも各誌の研究に対するスタンスの違いが見え、投稿の際の手がかりとなるからである。

参照した学術誌は『社会言語科学』、『認知科学』、『民族学研究』、『言語研究』、『アメリカ文学研究』、『アメリカ研究』の6誌である。

原稿の構成

- 表題
- 研究機関名

  理工系学術誌には欠かせないこの項目が、文系学術誌では必須条件ではない。『アメリカ研究』、『アメリカ文学研究』では本文中にこの記述はなし。雑誌末頁に執筆者名と所属の一覧表があるが、所属は大学名のみで学部名はなし。『認知科学』も各論文末頁に著者略歴を添付しているだけである。研究成果は個人に帰するとする考えとともに、研究機関と研究内容が名称を見ただけでは一致しない場合を考慮しての処置と思われる。
- 著者名

  文系の論文は単著が圧倒的多数。共著の場合は大学院生がファースト・オーサーでその指導教員との連名である場合がほとんどである。
- 要旨（和文または英文アブストラクト）

  これも理工系論文では必須であるが、『アメリカ研究』、『言語研究』には全くなし。『アメリカ文学研究』では日本語論文は末頁に英文アブストラクトがsynopsisとして載せられているが、英語論文ではそれがない。つまり、アブストラクトとしての役割ではなく、日本語が読めない読者向けに抜粋を英語で付記しているにすぎない。アブストラクトがないということは、急ぎ、要旨のみを下調べしたいような読者を対象に書いた論文ではなく、じっくり全文を読んで欲しいという編集側の狙いが読み取れる。

  『認知科学』は英文アブストラクトが巻頭にある。『社会言語科学』、『民族学研究』はともに和文要旨が巻頭にある。
- キーワード

  これがあるのは『認知科学』、『社会言語科学』、『民族学研究』、『言語研究』、ないのが『アメリカ研究』、『アメリカ文学研究』。要旨がないかわりにキーワードが挙げられている『言語研究』は変り種かもしれない。
- 目次

  『民族学研究』のみある。これは、ミニ・エスノグラフィーの体裁をとって本のように見せる趣向のあらわれかもしれない。節の見出しだけで論述内容の道標を提示できる「物語」性（ナラティブ）をもった論文に特徴的である。具体例としては博士論文の一部分にもとづいて書かれた次のようなものがある。[5]

目次

I 序論

1 アフリカ社会の宗教現象とモダニティ論

2 先行研究の問題点と本論の視座

II アチェム地方における妖術と精霊祭祀

1 アカン社会の妖術と親族規範

2 ココア開拓の発展と妖術問題の勃興

3 ２０世紀初頭の精霊祭祀とアチェム・ナショナリズム

III ココア開拓社会の民族間関係と呪術

1 開拓移民社会の構成と民族間の歴史的交渉

2 民族間の労働生産関係と小作層の再生産

3 農地をめぐる抗争と呪術疑惑の発生

IV 結論

理工系論文でこれを実行しても「目的・方法・結果・考察・結論」と無味乾燥な見出しで定型のオンパレードになってしまう。

・本文

章の見出し

1.2.3., I II III, (1) (2) (3) などの番号を振ったフォーマル・アウトラインがあるものがほとんどだが、『アメリカ文学研究』、『アメリカ研究』、『民族学研究』では多重階層ではなく、平板化した 1. 2. … 8. のような見出しが多い。これは「物語」性（ナラティブ）をもった論文の構成によく見られる手法である。

・付録事項

図、写真

表

例文

コーパス

参考文献

本文中にあらわれた順に通し番号を振って書くのが『アメリカ研究』、それ以外は著者名のアルファベット順に列挙する。

5. おわりに

以上のことからも明らかなように、文系の日本語の論文に関しては、分野や学会によって論文形式にかなりの違いが見られ、統一的なフォーマットが確立されているとはいえない。また、文系の場合は単発の論文よりも研究を集大成した著書のほうがより重視される傾向にある点も否めない。そのため、大学における論文指導も組織的に行われているとはいいがたく、多くの研究者がいわば自己流に論文を執筆するという傾向がいまだに強い。こうした状況にはもちろんマイナス面も少なくないが、そもそも論文を書くという行為は論文の形式さえ整えれば書けるようになるというものでもない。文系において論文の書き方に対する意識が高まりを見せないのも、そうした形式よりも内容に軸足を置こうとする文系的発想が関係しているように思われる。

注1：こうした論文の書き方指導不足を解消する目的で慶應義塾大学理工学部では1996年より「総合教育セミナー」という科目を新設し、日本の一般学生の日本語力を向上させる取り組みを始めている。

注2：この学会誌は2004年より学会名変更のため「文化人類学」とその名称を変えている。

参考文献

1) 澤田昭夫： 論文のレトリック, 講談社学術文庫, 東京(1983)

2) 沖　裕子： コミュニケーションの社会言語科学, 社会言語科学, Vo. 6, No. 1, pp. 1-5 (2003)

3) 三宅美博： 科学における存在の問題, 認知科学, Vol. 11, No. 1, pp. 1-2 (2004)

4) 出口顕： 編集後記、民族学研究、Vol. 67, No. 3, pp. 364-5 (2002)

5) 石井美保：子宮から農地へ –ガーナ南部のココア開拓移民社会における宗教実践の変容–, 民族学研究, Vol.67, No. 4, pp. 388~411 (2003)

著者紹介

井上京子：慶應義塾大学理工学部助教授、223-8521 横浜市港北区日吉4－1－1、 kyoko@educ.cc.keio.ac.jp
上智大学文学部英文学科卒、イリノイ大学人類学研究科博士課程修了、マックス・プランク心理言語学研究所ポスト・ドクター研究員などを経て現職にいたる。Ph.D.　言語人類学

An Inferiority Complex in Japanese Academic Writing: Problems and Proposals for Writers in Humanities & Social Sciences

INOUE, Kyoko
Faculty of Science and Technology
Keio University
kyoko@educ.cc.keio.ac.jp

Many of the Japanese writers feel an inferiority complex that they lack the necessary knowledge and skills of writing academic articles in Japanese. In order to identify the problems of such feelings, six academic journals in the fields of humanities and social sciences were analyzed and categorized in accordance with their organizational formats. This paper shows that the degree of the prospective writers' procrastination depends on what research fields they identify themselves with, which journal to send their article to, and how they view the activity of writing as a means of their academic accomplishment. It also illustrates the importance of teaching writing skills as well as understanding the editorial intention behind the format of each journal.

keyword: academic writing skills, linguistic anthropology, interdisciplinary, article contribution, humanities and natural sciences, Citation Index